

# 小学校における少人数指導の課題と展望

## ～教員アンケートからの考察～

佛教大学修士課程2回生 林 正 樹

### はじめに

近年、教育改革が様々な側面から実施されている。その方向性としては、子どもたちの個性にあった個に応じた教育である。その中でも学力向上の観点から実施されているのが少人数指導である。本論文では、その少人数指導を、まず分類し、次に先行研究であまり触れられていない現場の視点から検証するためある学校の教員アンケートをもとに小学校段階での少人数指導を中心に整理し検証していくものである。

## 1 章 少人数指導の形態

少人数指導の形態は、様々である。それぞれに特性があり、学校で実施される場合には学校の特色に応じた形で実施されている。以下の区分は、大まかなものである。

### ① 少人数学級

少人数学級は、教員定数法での学級定員は40名であるが40人を下回る規模での学級構成を行うものである。

### ② チーム・ティーチング (TT)

チーム・ティーチング (TT) は、授業を複数の教員で担当する方法である。複数の教員が同じような立場で担当する場合 (複数担任制)、T1、T2と言われる役割を分担して授業を行う場合などがある。さらに近年よく見られるのが複数担任制とT1、T2を折衷形態の常勤教員と非常勤教員 (補助教員) が授業を行う場合

などがある。

### (1) 複数担任制

複数担任制は、学級に本来1名の担任であるところを2名以上 (2名が一般的) で担任する方式である。

### (2) 特定教科のチーム・ティーチング (TT)

特定の教科で複数の教員で授業を行う方式である。

### ③ 少人数授業

少人数授業は、特定の教科で学級を分割し、学習集団と生活集団を分離させた学習方式である。その分割方法としては以下のような分割方法があるが、実際の現場では、生徒指導上の問題や教員の力量の問題など様々な条件によって、以下の分類に属さない分割方法もあるが、主なものとしては以下の通りである。

### (1) 単純分割指導

単純分割とは、特定の意図なく学級を分割し学習集団とする方法である

### (2) 習熟度別指導

単純分割と同様に学習集団を新たに構成する方式である。その分割方法が単純に分割するのではなく児童・生徒の学習内容の習熟の程度に応じて分割する方法である

### (3) 興味関心別指導

単純分割と同様に学習集団を新たに構成する方式で児童・生徒の興味関心の程度に応じて分割する方法である。

## 2章 先行研究の動向

国立教育政策研究所の『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究』などの先行研究では、少人数指導の必要性ではほぼ一致しているが、習熟度別指導の是非は意見対立が顕著である。しかし、現在、習熟度別指導は効果があるものとして実施されている。そして現場での実践報告も習熟度別指導について課題はあるものの取り組むべき学習形態であるというものが多く、課題への対策が明確でない。教員の間では習熟度別指導ではなく、後のアンケートのように少人数学級を希望する意見も多いが、その意見も具体的効果に裏付けられたものではなく指導する児童・生徒が少なれば指導しやすいという誰にでもわかる理由が大勢をしめている。このように先行研究は、それぞれの視点からの理論が展開され、研究者による理論と学校現場における実践が乖離している状況であるが、それにもかかわらず流行の学習形態として習熟度別指導を中心とする少人数指導が導入されている現状である。今後の課題は理論と現場での実践を総合的に検討するとともに、実際の現場で実践可能なのかということを現実的に検討すること求められる。

## 3章 少人数指導の課題

### ～教員アンケートから～

本章では、少人数指導を実践している教員にアンケートを実施し教員が少人数指導をどのように考え実践しているのか、またどのような課題があるのかを論及する。

### 1 アンケート調査の考察

#### ① アンケート概要

このアンケートは、少人数指導を実践しているある市のある小学校に勤務する教員〔教頭・教務主任を除く〕にアンケート調査を行った。

時期は2005年12月に配布し、少人数指導についての全体的に見た意見と、その各分類について良い点・悪い点を自由記述したもので記入ができたものを回収した。アンケート総数は、当該小学校に勤務する教員26名であり、回答者数は13名である。

#### ② アンケートの結果の分析

このアンケートは教員がアンケート項目を自由に記述する方法で実施した。その自由に記述した内容を、まず、検証1として問1から問3で質問している少人数指導の学習形態の主要なものである少人数授業・少人数学級・チーム・ティーチング（TT）について、良い点・悪い点の記述を考察し、教員が少人数指導の学習形態についてどのように考えながら実践しているかを明らかにし、どのような背景であるかを検証する。次に、検証1をふまえ、検証2としてこのアンケート全体に記されている内容の中で課題をあげて、課題が何かを考え検証する。

#### ③ 検証1

##### ～少人数指導の学習形態に関する検証～

##### 1) 問1の分析

問1では、少人数授業の代表的なものである習熟度別指導・単純分割指導・興味関心別指導について良い点・悪い点を記述している。これを順に検証していく。

表1は、習熟度別指導についてすべての記述を表にしたものである。この表を見ると、習熟度別指導は、良い点よりも悪い点が多く、否定的な見解が多いと言える。

良い点では、多くが子どもの実態に応じた指導がしやすいという教師側から見たことが多く、また児童側から見ても意欲的に学習できるという意見もあった。

悪い点では、様々な考えが記されている。多く見られているものを順にあげる。

表1 習熟度別指導についての良い点、悪い点

良い点	悪い点
自分のペースで学習でき意欲的に取り組み発表の場面が増える。	基礎コースで標準の域まで引き上げるのに時間がかかる。 各コースに対する子ども・親の不安。 コース作りメンバー構成作りに時間がかかる。
	児童の質がそろっているので発想や考えが同類の点が多く考えの広がりが乏しい。
指導しやすい。同じペースで授業展開できる。 一斉指導しやすい。競争原理が働く。	学力差がひらく。 子どもと保護者の心理状態が悪くなる。 子どものやる気がなくなる。
ドリル的な取り組みで効率良く学習できる。	同質な子どもによる集団になりやすく違う発想などが出にくくなる。国語での習熟度は何かわからない。 下位コースでは盛りあがりに欠けた授業になる(とくに国語)。 コース編成に手間がかかる上、評価にも時間がかかる。
	国語6年⇒文学などの読み取りで深まらない。読み取りの幅が限られる(ある子の発言からなるほどとクラス全体が納得し、他の子も読み取りが深まることある。いろんな考えの子がいて可能になる文学の読みの深化がある)。 算数6年⇒考えを練り合う学習ができにくい。答えを出すのが算数の学習の目的ではない。国語と同様の思考の深化がなくなり出しにくい。
	同学力の子どもを集めて学習しても刺激が少ない。とくに低学力グループでは発言が少なくく〜い雰囲気になる。ゴールフリーとかゴールは同じとかはっきりしない説明があるがM市では初めから進路を変えろ。発展コースでは難問をやらせろとうるさい。こんな差をつけることが本当に必要なの？ なんのために差をつけることを力説する必要があるのと思う。
算・国6年⇒子どもの学力実態に応じた進度授業が計画できる。	算・国6年⇒子どもの実態が均一化することによって授業の盛り上がり欠けるところが出てくる。とくに基礎グループ。
一般的にはその子の学力にあった指導がなされる点が長所であろうが公立学校(義務制)で導入するには方法論として考えなければならない面がある。例)基礎・基本を単元ごとに押さえた上で理解にあわせた指導を進めるなど生かすも殺すも運用しだいという感がある。	行政区によっても違うであろうが終始一貫、習熟度で通すことはいいとは言えないだろう(M市の場合)。 単元により、また分野により、また子どもの実態により判断されるべき。
	教える、教えられるという大事な場面が設定されにくい。
今の公教育の中ではあまりない。ただ、教育委員会などでは成果があるという報告が多いが…心理は別にしてわからない子には手厚くしてもらえないかな。	公教育の中で本当にいいのでしょうか。色んな子がいい面も悪い面も学んでいくのでは。できる子の気持ちはいかなもののでしょうか。わからない子が気持ち落ちこまないか。
4年国・6年国・算 それぞれの子もたちのレベルに合わせた指導ができる。 その科目が得意な子どもたちの意欲に答える授業ができる。 苦手な子どもたちにとって質問などがしやすい雰囲気をつくることできる。	4年国・6年国・算 子どもたちに身につけさせる内容の基準があいまいになる(取り組みレベルの違うグループ間で一つの出口を見出すのが難しい。評価の時も)。 グループ分けの際の確実な方法があるのか(子ども自身か指導者かどちらが決定するのか)。 子どもたち同士で区別の意識が生まれる。

1つめには、ほぼ同質の集団を集めて学習することは、刺激が少なく学習を深めることができないという意見である。とくに国語で感じられていて具体的意見として、「国語である子の

発言から、なるほどとクラス全体が納得し、他の子も読みが深まることになる。いろんな考え方の子がいて可能になる文学の読み取りの深化がある」と記されている。これは、学力という

表2 単純分割指導についての良い点、悪い点

良い点	悪い点
各グループの指導者間で指導内容の共通認識を図るのが楽。子どもたちの間で「できる」「できない」という区別の意識が生まれない。	
様々なわかり方の子どもがいてお互いに刺激されながら学習する場面が作れる。	グループで学習する時間が限られているのでクラス集団と違いお互いの意思疎通が不充分。
人数が減になるという点で指導者がひとりひとりの子どもの学力実態をつかむのに良いというところがある。	子どもの実態から考えて仲のいい子で固まる傾向があり、分け方が難しくなる。 子どもは集団の中でこそお互い学び合い働きかけがあって学習意欲や好奇心も喚起されるわけですから少集団、中集団、大集団もどう有効にいかすかが大切でしょう。
少ない人数で学習できる。	わざわざ教室を移動する必要があるのか。学級との意味の区別がつきにくく単に人数を減らすなら少人数学級であるべき。コース編成に手間がかかり評価にも時間がかかる。
新しい人間関係ができる。	クラスとは別にまた新しいまた新しい人間関係作りから始めるのの環境作りに時間がかかる。
少人数になるため手厚く指導できる。一人一人に指導がいきやすい。 できる子には発展プリントを作って指導している〔担任外の先生がつくってくれる〕。	指導者の先生の打ち合わせ時間が少ない。 子どもたちの生活指導上のことがわかりにくい。
偶然にできる集団の要素が多いので自然の集団として様々な考え方があらわれてくる。	理解力、理解度が様々なので、つまずきも多様でポイントをしばった指導ができにくい。
色々な考え方や実力の混ざった中なので考え方や意見の交流の学習で内容を引き上げていく層があること。	個々の意欲と進度に適合しない場合がでてくること。 初歩的・基礎的な部分に弱さをもつ児童の意欲が消極的になりがちなこと。

表3 興味関心別指導についての良い点、悪い点

良い点	悪い点
お互いの持つ知識や実践の交流ができること、楽しめること。	
生活・総合など体験的な学習が子どもたちによいと思われる。	興味の少ないことも子どもも学習する必要があることを学ばせにくくなる。コース編成にも手間がかかり評価にも時間がかかる。
総合的な学習では比較的良好とられる方法で、課題が共通のものとなり指導もしやすい。	友達の考えやグループの意向に左右される。
一応、児童の気持ちや思いを尊重しているので児童の側からすれば取り組みやすい。とくに社会・理科。	児童の思いと内容がずれている時、それが選ぶ段階で判断できない場合がある。
理科、社会、生活などで分野を分け学習を進め、交流報告しあうなどの方法を取り入れることが時間割の上で可能であれば。	基礎的な分野、領域で直接、指導者から指導を受ける機会が保障されていないので、子どもまかせになるような形態しかとれないならばいいとは言えない。
考える力の育成。 やる気がでる。	自分のやりたいこと、やりたくないことがはっきりしてしまい授業の一貫性がなくなる可能性がある。
	人数によって本当に自分の興味関心にあったグループに入れない場合がある。
	子どもたちに身につけさせる内容の基準があいまいになる〔取り組むレベルの違うグループ間で一つの出口を見出すのが難しい。評価の時も〕。 各グループで同じ内容が子どもたちに身につくのか。

点だけで教育を考えていくことができないことや、学力とは何かという根本的な問題も示唆する意見である。

2つめには、基礎コースの厳しさで、基礎グループの子どもの学力を向上させるか、授業の盛り上がりの問題や保護者や子どもたちの心理状況などがあげられている。

3つめには、コース作り、評価などに時間がかかるという教師側の仕事の多さに関する意見である。これは、従来の一斉指導に比べて他の教師との打ち合わせ時間が多く必要とされる指導であるから、その時間をつくるのが難しいことから記されていると思われる。

さて、表2・3では単純分割指導と興味関心別指導は比較的好意的に捉えられているが、打ち合わせ時間などの問題は習熟度別指導と同様である。この検証1をまとめると、次の図のように悪い点には共通点がある。

○表2、3からみる共通点と相違点

形 態	共通点	相違点
単純分割指導	打ち合わせ時間がない 評価、クラス分割に時間がかかる	
習熟度別指導		学力差の問題
興味関心別指導		適切な学習ができるか

つまり、共通点では少人数授業を行うことで従来に比べて教員の労働が増えている実態を示している。それに対して相違点では、それぞれの学習形態自体の効果について考えられている。このように少人数授業は、どの指導形態でも教員が負担を感じているものである。

## 2) 問2の分析

問2では、少人数学級についての良い点・悪い点が記述されていて表4は、それぞれを一覧にしたもので良い点が多い。少人数学級は、先にあげた少人数授業よりも肯定的にみられていることが一目瞭然であり極端に学級人数が少ない場合の懸念はあるが批判的でなく教員が少人

数学級を求めていることは明らかである。

## 3) 問3の分析

問3では、チーム・ティーチング（TT）についての良い点・悪い点が記述されていて表4は、それを一覧にしたものである。また、表5・6は、チーム・ティーチング（TT）のうちでも実施が多い方式についての記述を肯定的な部分と否定的な部分に分類し、一覧にしたものである。

良い点では、2人の教師で学習を見ることによって個別指導が必要な子どもに対応できる、また、図工や家庭や音楽などの教科の特性によって教師の専門性を生かしたチーム・ティーチング（TT）ができると子どもの力が伸びるという肯定的な意見が全員にあり、チーム・ティーチング（TT）が必要な学習形態であると教員は認識していると言える。その中でも、一斉指導でこぼれてしまう子どもに対する指導をチーム・ティーチング（TT）によって行うべきであるという意見が多く、個別支援の必要性からチーム・ティーチング（TT）が必要と教員は考えている。

悪い点では、打ち合わせが必要だが時間がない、T2がどこまで指導するのか、教員が気持ちを一致させ指導することなど、教員がどのようにチーム・ティーチング（TT）を実践するかという教員の問題がほとんどであり、チーム・ティーチング（TT）は、必要だが実践するには教員の指導体制作りが問題である。また、この項目から教員のチーム・ティーチング（TT）に対する考え方にはばらつきが推測される。単に宿題やプリントを見てもらえるという仕事分担の意識や補助的なT2を求める意見、共同して教材研究し授業を実践するという本来のチーム・ティーチング（TT）のあり方と乖離している面がみられた。このようなことをふまえてチーム・ティーチング（TT）の協力体制を分類すると次のようになる。

表4 少人数学級についての良い点、悪い点

良い点	悪い点
いいと思う。	あまりにも少ないと集団での経験が少なくなる。
どの学年でも⇒ひとりひとりに目が行き届ききめこまかい指導ができる。	遊びや体育の授業で男女15人ずつの集団ならチームゲームができにくくなる。
2年⇒一人一人の課題がよくつかめて適宜指導しやすい。低学年でも生活・学習の両面での課題が大きい子がふえている。きめこまかい指導がしやすい。	
教師が子どもたちのニーズにあった教育ができやすい〔目が届く〕。どの学年でも良いと思われるが、とくにしつけなどのできていない子どもが増えている低学年で絶対必要。	全学年⇒あまりにも学級集団が少ないと人間関係に広がりがなくなる。
最小必要限の条件として欧米並学級定員数を実現することは当然で現行より少ない30人学級は行政から見ればなされるべき。教育現場の側からは個別支援という点から見れば少人数学級は◎ ただ、それだけで教育が進むわけではありませんからその実態把握や子どもとの距離感の縮まったよさと中集団・大集団〔例 学年〕をどう相互交流させていくか⇒教育現場のうでのみせどころでしょう。	教育環境と人員の点でまだ条件が整いきっていないのではないかな。
人数が少ないことはことはやはり目が行き届く。生活集団と学習集団が一致するのが望ましい。	今は、せっかくの少人数学級を再度解体し、興味・関心別とか習熟度とかに分類する方法がとられているがこれは少人数学級本来の良さを台無しにするものだと思う。
きめこまかな指導ができる目が届きやすい。子どもたちにとっても担任との距離感が近く感じられる〔全学年〕。	学級の中でグループ化した人間関係が動きにくい〔特に高学年…〕。
どの子にも活躍の場面が保障できる。授業の場面でノートやプリント類をみてあげることができきめこまかい手助けができる。色々なわかり方、でき方をする子が同じ場にいることによって理解のしかたが深まる。	
授業が生き生きとし、なおかつ学級集団が前進するという意味では人数が少なく少なくとも一年間、同一クラスで学習を進めることは良いと思われる。	実際に実現していないので具体的にわからない。
一人一人に目が届きやすい。	人間関係作りが下手になる。
教師は人数が少ない分、一人一人の子どもの状態や気持ちなど把握し行き届いた指導ができると思います。	子どもの立場からすると少人数学級は級友が少なくなります〔クラスの枠というのは子どもの心に少なからずあると思うので〕。友人との仲たがいが喧嘩など子どもが他の友人グループへ逃げる場所、人がいないということはあると思います。色々な友人グループとくっついたり離れたりしながら人間関係をつくっていくのでその時に逃げ場がなければぶつかることを恐れてしまう。
4年⇒音楽指導で24名の場合 歌唱合奏指導に個別な対応がしやすい。また全員に独立した分担ができ個としての意識高揚に結びついた。	4年⇒音楽指導で24名の場合 24名で歌唱指導合奏上の迫力や重厚さの点で物足りなさが残る。

表5 チームティーチングについての良い点、悪い点

良い点	悪い点
5年算⇒T1とT2で児童の全容がつかめる〔見える〕ため 意思表示を早期にキャッチでき、手がうてる。T1・T2の 分担のあり方でそれぞれの個性が生かせる。	T1・T2の連携のための物理的〔時間的〕不足。
宿題・プリントなどの仕事の分担ができる。 低学年にとってはT1・T2〔教師〕しだいで機能する。 2人の教師で1つのクラスを見ていける。 子ども個人の指導の仕方を二人の教師で考えていける。	T2がどこまで指導するのか⇒T1の指導を基本とするのか どちらか。 T2が一人の子どもにつくのか全体につくのかなど。T2の 役割？ 子どもたちがどのようにT2を受け入れるか。
一斉指導の中ではついて行にくい子どもに個別指導を同 時並行できる。 授業の場面でノートやプリント類を見てあげる時間が短縮 できる。	指導者同士の事前の打ち合わせや研究の時間が必要だが現 場ではなかなかこの時間が持ちにくい。
T1が指導しT2がその補助をしたり、わからない児童やよ そ見している児童への指導ができる。	打ち合わせの時間が必要。こまかく言い出すとT2、T3と 児童の集団によっては何人もいるときがある。
低学年では指導自体に手がかかることが多いのでどの教科 においても有効なのではないか。T2がいることでつまずいた り遅れたりする子どもたちへの個別指導が可能になる〔全 学年、教科⇒算は特に、国理音体図〕。	T1・T2の指導方法をきちんと統一しておかないと子ども たちが混乱する〔どの学年、どの教科も〕。
各教科⇒きめこまかい指導がしやすい。 低学年⇒生活指導面、しんどい子どもにも対応しやすい。 実技教科⇒専門性のある教員がT1・T2のいずれかにいれ ば子ども達はのびる。	いずれも打ち合わせの時間などが現実的な勤務時間ではあ りえない。打ち合わせのない授業になってしまうこともある。
低中までは有効。高になると年齢、性別により担任との信 頼関係を築く点を考慮して配置されないと運営上難しいか も。 国・算⇒個別支援という点で有効。 理・図⇒準備を事前にする、あと片付けなどで有効。 音・国・体⇒準備もそうだが教科指導などで得意を生かし たTT配置がされると担任する側としてはありがたい。	退職校長がつく場合は×。
低学年、算、音、図、体 6年算数で 一斉指導で取り組めない〔理解できない〕子どもにとって その子に応じた言葉で指示・補助ができる。	5、6年国 どの学年、教科であろうと教師間の教材研究うち合わせが とれない。時間外のことになる、共通認識が得られない限 り効果があがりにくい。
教室の中で遅れる子や個別対応のため必要な子に対応で きる。	二人の教員の気持ちを一致させないといけない。この点が 難しい。
全体を二人が見れてわかりにくい子にも焦点があたる。 T1・T2の連携プレーがうまくいけば倍増していく。 理解しにくい時などに対してのフォローができる。	T1・T2の連携がうまくいかないとプラスどころかかえっ てマイナスになる。クラスが大変な場合は少人数よりTTが よい。

表6 ① 補助教員についての肯定的意見、否定的意見の分類〔補助教員についてどう思いますか？〕

肯定的意見	否定的意見
うまくいけばお互い分担できてよい。	二人の関係がうまくいかないとかえってマイナス。
低学年では指導全体に手がかかるので有効。 個別指導が可能となり有効。	
人にもよるが複数体制はよい。	
1年で入学当初の学校生活に慣れるまでの時間がかかった ので助かった。	
多数の児童を複数の目で見ることができるのは教師一人の 判断や考えに陥らず冷静な視点をもてる。教師も客観的に 見ている目があるから日々の色々な反省をふりかえりも相 談できると思います。子どもにとっても何かしかられたり 気持ちが乗らなかつたり心にひっきりがある場合、教師 にしかられたり注意を受けたあとにT2でなぐさめられたり 話を聞いてもらえたりすることができると感じた。とく に低学年の大人とのつながりをもとめて安心するという時 に有効〔補助教員経験から〕。	T1T2はそれぞれ尊重し協力できる関係が築けないと教師 の負担はより増える〔気をつかったり相性があわないと長 時間勤務は心労もある〕。
必要。	子どもから見れば同じ先生なのに勤務形態が違うのは不自然 〔放課後いない、休業中は失職など〕週あたり26時間な ので補助と担任の打ち合わせができない。制度的不備でTT とは言えない。
一斉指導でついていきにくい子どもに個別指導するのがよい。	
	M市で退職教員が補助になり担任と意思疎通を欠くことが あると聞く。補助が補助にならず担任批判まで校長にする ⇒担任がなやむ。
	現在の補助教員加配制度はT・T授業と考えられない。なぜ なら教材研究をしてないから。教科の特性、系統性、教え 方など時間をとってわかって指導にあたれるよう制度改革 すべき。補助加配より低学年こそ少人数学級を実施すべき。 そして生活上の加配教員を配置すべき。

表7 ② 特定教科でのチームティーチングについての肯定的意見、否定的意見の分類  
〔特定教科のチームティーチングについてどう思いますか？〕

肯定的意見	否定的意見
よい。算数や理科の実験など。	
TTが有効に機能する教科もあれば、特に必要ないと思われ るので良い。	
算数・国語での形態はチームティーチングが良い。	
算数や活動をする教科で有効。	
とくに実技などで必要。専門性があれば子どもは伸びる。	
理科、芸術系、体育で有効⇒専門性を生かす。	
図工、体育、家庭などで良い。実技指導で細かくできる。	



○チーム・ティーチング（TT）の協力体制分類

形 態	内 容	事 例
共 同 型	2人が対等な立場で協力	特定教科
補 助 型	T1の指示でT2が動く	補助教員
無期待型	T2はいるだけ	組織上やむを得ずT2を導入した

この分類の中で、無期待型はアンケートには見られないが、教育委員会から一律に補助教員が配置されたが、実際、担任は「自分ひとりで教育活動ができる」と思っている場合などが考えられる。チーム・ティーチング（TT）は、共同型であるべきだが実際は打ち合わせ時間がないなどの悪い点によって補助型や無期待型になってしまうことが多いと思われる。この補助型の代表的存在で低学年補助教員について記されているのが表7である。意見としては、肯定的な意見がほとんどで2人の教員で子どもを見ることのメリットと低学年における生活指導上の支援の必要性を感じている教員が多いことがわかる。

しかし、否定的な意見では、2人の教員の関係がうまくいかないと指導以前の問題である、補助教員の勤務が非常勤講師であり、打ち合わせ時間が確保できないことや休業中は失職していることなど教員の勤務上の問題がある。この補助教員方式がチーム・ティーチング（TT）になっていない実態を具体的に示している意見として「現在の補助加配制度はTT授業と考えられない。なぜなら教材研究をしていないから、教科の特性、系統性、考え方など時間をとってわかって指導にあたるよう制度改革すべき」があり大きな問題と言わざるをえない。

このことから、2人で教える難しさからくる問題と補助教員の制度的不備があることがわかる。

次に表8の特定教科では、肯定的な意見ばかりであった。教科の特性に応じて教員の専門性を生かすことで子どもたちにより良い教育ができると教員は考えている。

4）問1から問3の総括

問1から問3までの少人数指導についてそれぞれ良い点・悪い点を総合的に分析すると、少人数学級を必要とする意見が多い一方、少人数授業、とくに習熟度別指導には批判的な意見が多いことがわかる。つまり、習熟度別指導を中心に効果への疑問が現場にあることがわかる。そして、少人数授業やチーム・ティーチング（TT）では、教員の打ち合わせ時間がない、教員の人間関係が難しい、補助教員の勤務の問題など授業をする以前の問題が多く、少人数授業やチーム・ティーチング（TT）を行う前提として、条件整備ができていないという認識が現場にあることがわかる。この条件整備の面を本論文では、教員組織上の問題と呼び、以下で詳しく検証していく。

③ 検証2

～少人数指導についての課題を探る～

表8は、問1から問5〔問4を除く〕について少人数指導の課題を抜き出し、その課題を教員組織上の問題、子ども・保護者に関する問題、物理的な問題、その他の問題4つに分類したものである。そしてアンケートでは次の図のように問題点の中でも教員組織上の問題が大部分を

○アンケートからみられる少人数指導の問題

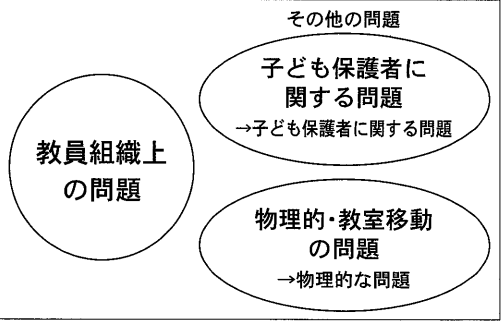


表8 すべてのアンケートについて問題点、課題の内容を分類

		教員組織上の問題	子ども保護者の問題	物理的な問題	その他の問題
問1	習熟度別指導	コース作りに時間がかかる。 評価にも時間がかかる。 打ち合わせの時間がない。 子どもたちに身につけさせる内容の基準があいまい〔取り組むレベルの違うグループ間で一つの出口を見出すのが難しい。評価の時も〕。	各コースに対する子ども保護者の不安。 子ども保護者の心理が悪くなる。 子どもたち同士で区別の意識が生まれる。 下位コースでは盛りあがりにかけた授業になる。児童の質が同質で盛り上がり欠ける。		グループわけを誰がするのか。 国語での習熟度とは何かわからない。 学力の差をつけることが良いのか〔公教育で習熟度別指導が必要なのか〕。 低学年では習熟度の見極めが難しい。
	単純分割指導	コース作りに時間がかかる。 評価にも時間がかかる。 打ち合わせの時間がない。	クラスとは別に新しい人間関係作りが始まるので環境作りに時間がかかる。	わざわざ教室を移動する必要があるのか。 人数を減らすなら少人数学級であるべき。	生活集団と学習集団をどのように考えるかの問題。
	興味関心別	コース作りに時間がかかる。 評価にも時間がかかる。 打ち合わせの時間がない。 子どもたちに身につけさせる内容の基準があいまい〔取り組むレベルの違うグループ間で一つの出口を見出すのが難しい。評価の時も〕。	子ども任せになりすぎてしっかりと学習できにくい。 児童にコースを選択する力があるのか。	希望人数によって希望のグループに入れないかもしれない。	
問2	少人数学級	現実には人的環境が整っていない。	あまりに少ないと集団活動で不都合。 人間関係作りが下手になる。		
問3	チームティーチング	打ち合わせの時間が現状の勤務形態でとることはできず、打ち合わせのない授業になっている〔補助教員の勤務形態に発する問題など制度的問題・T1T2の打ち合わせ時間のなさが発する授業の問題・T2の役割の問題・担任批判をする校長経験者の補助教員〕。	T2を子どもたちがどのように受け入れるか。		
問5	自由記述	少人数指導を進める上で担当者間の進度や授業内容の連絡、また評価の仕方など打ち合わせに多くの時間が必要であり、教師の忙しさの原因の一つになっていると思う。 条件整備がないとうまくいかない。教師側のバーンアウトも考えないといけない。 少人数授業や低学年の補助加配の現在の制度はまやかし、つまりお金を使わないで府民・国民の声を一定聞いてだけにすぎない。 加配がたりない。打ち合わせができない。 補助教員の勤務形態が問題。 行政単位で制度が異なるのは仕方がないが現場での工夫、裁量を与えて欲しい。 少人数担当と担任の意思疎通が課題。担任からすると「自分の融通のきかない時間」と言うイメージが先行して少人数指導のメリットを捉え生かすことの妨げになる。		教室が足りず給食ルームや会議室をつかっている。そこに移動するにも時間がかかる。	現状は考え方の工夫や創意工夫がなされず画一的な授業になっていて子どもたちにとっては面白くない。欠席しても補充されない。どんどん進んで実態がある。

占めている。教員は、少人数指導という新しい指導形態に戸惑い混乱している状況にある。

とくに問5の自由記述では実践をふまえ意見が具体的に述べられて、少人数学級を除く少人数指導に対して問題意識と負担を感じている実態を示している。

子ども・保護者に関する問題では習熟度別指導が能力差別につながらないかという懸念が多い。物理的な問題点では少人数授業を行うにあたって学校が設備面で対応できていないことを示している。

## 2 問題点の検証

前述の検証で少人数指導には、様々な問題があることがわかった。ここでは、その中でも多く見られた教員組織上の問題点を中心に検証していく。

### ① 教員組織上の問題点

少人数授業の項目で多く書かれている「コースづくりに時間がかかる、評価に時間がかかる」などについて考えよう。学級を分割して行う少人数授業では、打ち合わせの時間が学級で行う授業に比べて多くなる。さらに教員は日々の各種会議、その他の教科の教材研究など多くの仕事を抱えている。そして忘れてはならないのは教員も8時間労働である。この状況で少人数授業を円滑に行うために相談する時間を確保する

のは困難で下の図はそれを示すものである。

これは、すべての授業の補助をした場合、6時間労働が3日、5時間労働が2日となり週当たり28時間労働となり、2時間の超過勤務となっていてしかも、これは打ち合わせ時間が全く確保されていない。これは、アンケートにも「教材研究ができないのでチームティーチングとは言えない」という回答を裏付ける事実である。

もう一点、補助教員制度には難しい問題があることをアンケートは示している。教員の人間関係の問題で担任と補助教員制度には人間関係が影響していると思われる。その関係を分類し図示すると以下ようになる。

#### ○担任と補助教員の関係

形 態	内 容	事 例
主従型	担任が主導	担任が年上、経験豊富
主従逆転型	補助教員の力が強い	補助教員が年上
協調型	協力	人間関係がうまくいっている

仕事に人間関係を持ち込むのはナンセンスであるが、事実としてこのような問題点があることを放置して補助教員制度を考えることはできない。この教員どうしの関係を円滑にできるような配慮も必要である。

以上のように教員組織上の問題は、教員労働上の問題が根底にあり、制度上の不備からくる

ものである。現状では、少人数授業やチーム・ティーチング（TT）の理論上の効果を根拠として制度が導入されているが人的保障が中途半端であるため、現場の教員にしわ寄せがきている。アンケートにもあるように人的保障がなければせっかくの効果も逆効果になるおそれもある。まず、

#### ○補助教員の勤務状況と授業時数の関係（小1、週26時間勤務場合）

曜 日	授業数	指導が必要な時間（最低限）	補助教員の労働時間
月	4	8時30分～13時30分	5時間
火	4	8時30分～13時30分	5時間
水	5	8時30分～14時30分	6時間
木	5	8時30分～14時30分	6時間
金	5	8時30分～14時30分	6時間
計	23		28時間

※指導が必要な時間には給食掃除等すべての教育活動を含む  
※指導が必要な時間は学校によって始業・終業時刻は異なる。

少人数指導の効果を検討する前提として教員の勤務の現状を直視した指導体制を構築していくことが必要である。

## ② 子ども・保護者に関する問題

これは、教員からの視点でみた子どもや保護者の問題である。その中でいくつか答えられていたのが習熟度別指導に対する不安感である。つまり、習熟度別指導を実施することによって子どもたちの能力差別がおこり、それが保護者にも波及して不安定な心理状況になり、学校教育に悪影響を及ぼすということである。それに関連する意見として「クラスとは別に新しい人間関係づくりが始まるので環境づくりに時間がかかる」という回答があり、それについても考える。これは、学習集団と生活集団をどのように考えていくかという問題である。従来は、年度当初に決められた学級で授業を受けるという方式が一般的で、学習集団と生活集団が一致している教育の良い点としては、問4のアンケートに書かれている「子どもの生活面を含めた実態を丸ごと把握している学級担任が学習指導することで、実態に応じた教育活動ができる」ということである。また、同じ教室で授業があり同じ担任が指導をしていくので、新しい人間関係を作る必要もなく、各場面でスムーズに授業ができる。それに対して少人数授業は、学習集団と生活集団を分離している方式で、良い点としては学年の子どもを複数の教員で見えていくことができ、指導内容・方法を相談する必要があるためベテラン教員であっても初任者の教員であっても教員の能力の差による教育格差リスクは減る。ただし、学習集団と生活集団が一致している場合に比べて、トラブルへの対応が柔軟にできないことや、教師との人間関係づくりなど実質の授業時間が減ることが予想される。

このようにそれぞれに良い点・悪い点がみられるが、子どもや保護者の懸念を払拭するだけ

の説得力が学校に求められ、それがなければ習熟度別指導は子どもたちが混乱することが予測される。

## ③ 物理的な問題

物理的な問題とは、少人数指導を行うにあたっての学校施設上の問題などを中心とするものである。

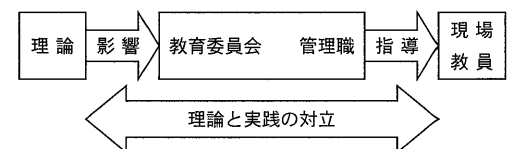
まず、少人数指導が実践されるようになって教室不足の問題が多く和学校でおこり、アンケートにも記される問題が顕在化したのである。

次に少人数授業の項目での「移動するのに時間がかかる」ということについて考える。大人も移動し集合するには時間がかかる。まして低学年段階で教室を移動し定刻どおりに授業を始めるのは困難である。そのため休憩時間が授業と授業の間にあるが計算どおりには子どもは動かない。遊びに行行って帰ってくるだけで定刻を過ぎることが多い。その上に教室移動が加わっては、実質的な授業時間が割かれてしまう。よほど子どもたちを時間通りに動かしていかないとこの問題は解決困難である。

## 3 アンケートのまとめ

前項で、アンケートについて分析してきたが、教師側から見て少人数授業には多くの問題があり、それらは決して教員の怠慢から来る問題ではなく現実的に厳しい教員の勤務状況や学校設備などに起因していることが多くあることがわかった。また、先行研究と学校現場の意見が一致していない点が多いこともわかった。図示すると次のようになる。

### ○少人数指導の全体像



先行研究の理論では少人数授業のうちでも習熟度別指導に対する効果を強調するものが多く、その影響を受けて教育委員会、管理職は現場にその理論を下ろして、実践されているがアンケートにあるように教員組織上の問題をはじめとする様々な問題が湧き上がっている。つまり、理論と実践が対立している構図である。

それでは、教員はどのように少人数指導を行っていけば良いと考えているのだろうか。問4の項目で具体的にあるので少人数指導の具体像について考えていく。

問4に回答しているすべての教員が少人数指導の大前提として少人数学級を求めている。これは学級人数が少なればきめ細かい指導ができるという理由である。

また、低学年を中心に生活指導面でのチーム・ティーチング（TT）や学習に遅れが見られる子どもに対してのチーム・ティーチング（TT）を求めている。さらに教科の特性によって教員の得意分野を生かした専科制度が導入されるべきという意見もいくつかみられている。

高学年では教科によって習熟度別指導や教科担任制などを子どもの実態に合わせてという様々な意見がある。

このような意見とアンケートでの検証をふまえて現場が求めている意見をまとめると、まずは少人数学級が必要でその上で人的保障をきっちりとしたチーム・ティーチング（TT）が必要であり、目的としては、生活指導や学習からこぼれる子どもへの対応である。また、習熟度別指導には批判的で、教員組織上の問題、物理的な問題など子どもの視点を考える以前の問題が多くある。もちろん、子どもたちにとって習熟度別指導をはじめとする少人数授業を疑問視している意見が多い。

## 4章 今後の少人数指導のあり方

本章では、検証を総合的に捉え、少人数指導のあり方を具体的に述べていく。

### 1 低学年の少人数学級・チーム・ティーチング（TT）の活用

教員からみると少人数学級は、必要不可欠なものであるという認識である。また、鳥取県『30人学級の考察について』では少人数学級は、学力の観点からはまだ効果があるとは言い切れないが、子どもや保護者からみて落ち着いて学習ができる環境として求められるべきであるとされている。ただ、一斉に学校で少人数学級を実施するのは財政的問題を考えると困難である。現在は、教員定数法や定数改善策で以前に比べて、どの学校でも基本的には加配教員が配置されているので、この加配教員を優先的に低学年における少人数学級要員として配置することで教育環境を整えることができる。また、その他の少人数学級実現のための動きとして幾つかの自治体では臨時に講師を採用している場合もみられるが臨時に採用することは、少人数学級の実現という点では良いが、臨時的措置のため継続性や勤務する教員の身分保障などの観点から問題がある。

次に、チーム・ティーチング（TT）についてだが、先行研究の中心的存在の国立教育政策研究所の『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究』では効果がないとされているが、アンケートでは必要とされている。これは先行研究では学力の面を中心に考察されているのに対し、アンケートでは生活指導面や一斉学習からこぼれがちな子どもへの個別指導を主眼としている。つまり、この2つは全く別の視点で考えられている。

確かに学力の面からは、それほどの効果がないかもしれないが、多くの自治体が低学年を中心に補助教員を配置していることを考えると全

全国各地で低学年の指導が厳しく、とくに生活指導面での困難さが目立ち始めていて個別支援が必要な子どもの増加している実態であり、アンケート回答の背景でもある。

ただし、現在実施されているチーム・ティーチング（TT）は多くの場合が非常勤講師によるものでアンケートにあるような勤務実態が少なからず起こっていることが推測される。当該学校の場合は、週当たり26時間であり、全国的に見て比較的恵まれている勤務状況であるのに、アンケートでは様々な問題が指摘されて、人的保障を上でチーム・ティーチング（TT）を行っていかねば効果はあがってこないと言える。財政的問題があるが様々な工夫で効果的な補助教員制度を構築可能である。

以上から次のようなことが効果的で現実的である。

- ・低学年での少人数学級
- ・低学年でのチーム・ティーチング（TT）  
[人的保障]

理由⇒生活指導面と個別的支援、教室移動などを伴う少人数授業を実施するよりも、学級教室で1日、落ち着いて学習することが必要。

## 2 少人数授業の活用

少人数授業は、国立教育政策研究所の『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究』を中心とする先行研究では習熟度別指導を中心に効果的とされる見解が多い。しかし、アンケートでは打ち合わせの時間不足などの教員組織上の問題や教室不足などの物理的な問題や習熟度別指導への不安感など批判的な意見が多くみられている。これらの全く一致しない見解は、研究と実践が分離している状況を如実に示していて、実際に学校に効果的に導入することが難しい。ところが、その効果や現場での問題を検証する前に、上からの改革によって少人

数授業が導入されているのでさらに現場は混乱しているという実態がアンケートでは示されている。

それでは、習熟度別指導に関するこの研究と実践の分離をどのように埋めていけば良いのだろうか。先行研究の代表的存在の国立教育政策研究所『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究』では5年生の算数科で習熟度別指導の効果が大きいことが比較的大きなサンプルから証明されている。また、アンケートでも意見は分かれているものの算数科の習熟度別指導は有効であるというものもある。

このようなことから、小学校高学年で算数科で習熟度別指導を学校の実態に応じて導入することが良いのではないだろうか。私の経験からも算数科は教科の性質上、習熟度別指導が比較的適していて指導もしやすく、習熟の程度に応じたクラス編成もしやすい。

算数科に次いで習熟度別指導を中心とする少人数授業が導入されている国語科について考えよう。国語科における習熟度を推し量ることは非常に難しいのではないだろうか。評価テストによって点数化しなければならないのは現状の学校教育システムでは当然だが、これをそのまま習熟度と捉えて良いのかは疑問がある。アンケート回答にある「お互いが意見を出し合って意見を交流し、互いに納得する」というような場面が国語科の授業では多くある。それが習熟度別指導の場合は、同質の子どもが集まり、まして多様な考えを受け入れ成長する小学校段階では自分と違う考えを聞き受け止める機会が多いのが国語科で、それを大切にしなければならない。さらに、国語科での習熟度別指導を体系的に検証されている先行研究は算数科に比べて少なく、主要科目だからといって安易に習熟度別指導の対象とすることは時期尚早である。

さて、単純分割指導や興味関心別指導について簡単にふれていこう。単純分割指導は、どの

教科においても教える人数が少なくなるので教えやすく子どもたちにとっても教員の距離が近いことがメリットであることはすでに述べている。しかし、アンケート回答の検証で述べたように教員組織上の問題や物理的な問題を引き起こす指導形態であるので、単純分割指導を導入するのは厳しい現実がある。また、単純分割指導を導入するに当たって学校として将来的に少人数学級を中心に行うのか習熟度別指導の前段階としてなのかを明確に方針として持たなければ中途半端になってしまう。興味関心別指導については総合的な学習の時間など体験的な活動が多い場合に随時導入されればよいが、学校教育全般から考えると頻繁に行うことは学習集団と生活集団を完全分割することにつながるのので、教科・単元・子どもの実態に応じて慎重に行われるべきである。

以上から少人数授業については以下のことが言える。

- 1] 高学年算数科で実態に応じて習熟度別指導。
- 2] 国語科での習熟度別指導は時期尚早。
- 3] 単純分割指導は過渡期的な指導方法。
- 4] 興味関心別指導は体験的な活動で実情に応じて実施。

このような形で少人数授業を行えば教員組織上の問題と物理的な問題が緩和される。つまり、算数科と国語科で全学年行った場合には、打ち合わせの時間が多く必要になる。算数科に集中することで少人数授業担当の教員と担任の打ち合わせ時間が減り算数科に絞った打ち合わせができ、少人数授業担当教員の授業時数が減ることによって教員の特性を生かして実技科目を高学年で担当するなど専科的な配置も可能となり高学年での緩やかな教科制の導入も可能となる。また、複数教科で少人数授業がされないことから少人数指導教室への移動が少なくすみ、子どもの移動時間が大幅に削減され、学校生活における実質的な学習時間が確保でき、効果が比較的に

らかである算数科での学力向上が見込めること、中学校での教科制への導入段階の意味づけなどからも現実的な少人数指導である。

### 3 子ども・保護者への説明責任

少人数指導を行う際には、子どもや保護者にその理念と具体的な教育方針を示す必要がある。ところが、アンケートからもわかるように教職員と学校方針、さらに教育委員会の意見が一致していなく、上からの方針によって教職員が少人数指導を実践している状況である。多くの学校で導入され始めている習熟度別指導は、現場では反発も多いが教育委員会の指導によって積極的に行われているのが実態であろう。そして、学校長など管理職からの説明会という形で保護者に説明される。すべてが形式的で練り上げられたとは言い切れない。

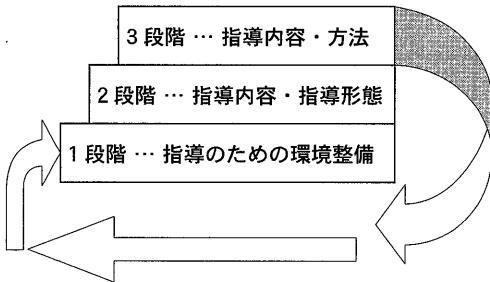
このような形式上の共通理解で新たな制度が導入されているのは、受けて側の子どもや保護者が一番、迷惑し混乱を招く。とくに子どもたちは習熟度別指導に対しては敏感に反応する。現状の日本の社会風潮の中では習熟度別＝能力区別と考えられるのが現実であるので、慎重かつ綿密な計画の下で導入されなければならない。田中博之著『少人数指導・少人数指導の課題「効果的なコース編成とその配慮」2』＜啓林館＞ではその人権教育と関連付けて導入すれば、この問題は解決すると述べられているが、日本の風潮からすると容易ではない。学校における人権教育だけではなく、日本社会全体から捉えていかなければならない難しい問題である。

### 4 現実的な少人数指導のあり方

ここでは様々な現状をふまえて短期的に実行可能で効果がある少人数指導のあり方について具体像をあげる。その基本的な発想としては、小学校発達段階に応じた教育活動を系統的に行うこと、現代の子どもの実態に即した制度設計

を行うことである。前記のように現状は理論と実践が乖離していて問題点が山積しているのに教育改革の一環として行われているが、次の図の視点が欠けている。1段階の環境整備を基礎として2段階の指導方法・形態を決定し、保護者に説明する、そして3段階で指導内容・方法の工夫をしていくという段階が必要である。つまり、積み上げが大切なのである。さらに、積み上げができたならもう一度、1段階を検証し、2段階、3段階を検証していく絶え間ない検証を行いながら実践することでより良い少人数指導ができる。

○少人数指導実施のためのサイクル



この図のサイクルを繰り返すことで少人数指導が子どもたちにとってよりよいものとなり、子どもの発達段階に応じた指導体制と指導方法が構築されていくだろう。

具体像としては、香川県の低学年での複数担任制を敷くなどの『香川式指導体制』や京都府の低学年で補助教員を配置し、高学年では市町村の実態に合わせた少人数授業を行っていく『京都市少人数教育』などは、求められる少人数指導のあり方に重要な示唆を与えていて制度としても比較的整っていて上の図にある1段階の基礎が整備されている。ただ、運用面で大きな課題があるので、その点に改善を加えた私見が以下のものである。

- ①低学年での少人数学級プラス補助教員〔補助教員の待遇を改善する〕
- ②高学年での算数科に限っての習熟度別指導

〔学校の実態に応じて〕

- ③音楽科・図工科・家庭科など可能な範囲での専科制〔加配教員の活用、学校の実態に応じて〕

この3点を基本的な少人数指導のあり方として提言したい。現状は、多くの仕事が教員に降りかかっていて形式的で中途半端になっていて効果は薄い。この提言では、理念と制度を簡素化し、現状の研究・報告で評価の高い項目を制度として取り入れ、それが現在の教員組織上や子どもや保護者の懸念、物理的な問題など配慮することで問題点を減らすという現実的な視点にたち、小学校教育で必要不可欠なことを実践するものである。

1つめの低学年での少人数学級と補助教員は欠かすことはできない。低学年の子どもたちの指導の厳しさはすでに述べたとおり、その子どもたち学習習慣・生活習慣を身につけさせなければ、後の学習にも悪影響を与える。例えば、生活規律がついていない子どもが多ければ高学年での習熟度別指導の際、教室移動に大幅に時間がかかり実際の授業時間が減ってしまう事態が考えられる。もちろん、授業が成り立たない最悪の事態も考えられる。つまり、生活習慣を低学年段階でしっかりと身につけさせることを大目標にする必要がある。それが後の学力向上にもつながるので、習熟度別指導をはじめとする少人数授業を導入するよりも効果があがると思われる。

また、この視点から補助教員を基本的には生活習慣指導担当及び個別支援担当教員と位置づけ担任教員との関係を明確化させ、打ち合わせ時間の確保、休業中の身分保障などを行うことで補助教員が働きやすい環境を整えることが必要である。そして、どのような形〔担任教員が年下など〕であれ担任教員が主導権を持ち、補助教員は補助の役割を担うという明確な役割分担と労働の観点から勤務時間などの明確化と適



正運用が求められる。

2つめの高学年算数科での習熟度別指導であるが、これは個に応じた教育の観点から導入されても良いものであり、効果の比較的確かな算数科に集中することで教員の教材研究の時間や打ち合わせ時間の確保が可能となり、より良い授業ができることが予想される。また、子どもたちの移動時間も削減できている。さらに、中学校との連結の視点からも担任以外の教員と接する機会が保障されている上、担任と接する時間の確保もできていることからバランスが良く、学習面・生徒指導面双方の効果が期待される。そして、算数科の習熟度別指導に専念することによって加配教員の持ち時間数は削減される。その削減分をその教員の得意科目を専科として担当することで子どもたちに専門的な教育を行うことができる。国語の時数の多さと音楽科、図工科、家庭科の時数の少なさを考えると実現可能な方法である。

現在の教育に求められるのはバランスである。ゆとりか学力向上か、少人数学級か習熟度別指導か、平等か競争という二者択一の考え方では教育に未来はない。今まで考えてきた少人数指導においても二者択一の論議がなされ、研究と実践が分離し現場の教員も混乱し子どもたちはさらに混乱している。バランス感覚を失い現場の実情を軽視した少人数指導では、一度しかない子どもたちの学習機会と学校生活を空虚なものにしてしまう。実情にあった少人数指導を教職員が一丸となって実践することが子どもたちの成長に責任をもつ教育者の使命である。

## 終章 ～本研究の課題と展望～

今まで述べてきたように少人数指導は、必要とされる教育であるが様々な問題があることがわかった。しかし、それにもかかわらず先走りのごとく実践されているのが現状である。子ども

ものためにより良い教育活動を行うという目的は教育者が誰も考えていることであるが、考察してきたように少人数指導を実施するためには学校施設や教員の勤務時間や雇用の問題などの整備が必要である。その中でも、教員組織上の問題は、大きな問題である。現状の少人数指導では教員の仕事に負担がかかりすぎて本来の少人数指導の効果をを得ることは難しい。とくに小学校においては、すべての教科を教えるため教材研究の時間が殆どない状況にある。学校は、学習する場所というもっとも基本的な存在意義をなおざりにしている現状が現実存在するのに、さらにそれを加速させるような動きは現場の実態を軽視するものである。

少人数指導は、いわば新しい教育制度の導入である。制度を導入する際には、慎重に対処しなければならない。まして、教育においては企業に見られるリストラや意識改革など明確な対処方法が難しく結果としてあらわすことも困難である。例えば、企業であるなら将来の利益のために、今年度はマイナス成長でもやむを得ないという場合もあるが、教育では、そのような発想は決して許されるものではない。子どもにとっては、どの1年も大切な年月なのである。実験のように考えてはない。現状、存在する教育資源で実現可能な少人数指導を導入していくことが子どもたちの視点から不可欠である。

その上で少人数指導のどの形態が、どの教科、どの学年で効果的であるのかを検証していく必要がある。それができれば設備・教員数などの諸条件でどのような少人数指導が現実的に可能かわかり、子どもたちにとっても無理なく効果的な学習ができる。

しかし、難しい点は学校の実態は多様であるということである。学校規模・地域の実態など一般化しにくい要素が多くあるからである。そのため学校や当該自治体の実態にあった少人数指導を行っているのが実情である。

さらに根本的な問題を考えることも必要である。それは、とくに習熟度別指導を中心とする個に応じた教育の是非である。個に応じた指導は、多様化する社会の中で必要不可欠であるが、公教育の中でどこまで個に応じた教育ができるのか、つまり、今まで日本の教育が大切にしてきた一定の平等教育や集団形成から効率よく学習をするという競争原理型の教育制度に転換するのかという問題である。習熟度別指導は能力別の指導ではなく、個に応じた教育の一環であるという見解が多く研究者の中では見られている。しかし、習熟度別指導は保護者や子どもから見ると結局は、能力別に近いイメージではなかろうか。できる子ども、できない子どもの差を結果として広げてしまう恐れもある。それは、現在の日本社会で見られる二極化構造と同様である。このようなことを許容していくのか、それとも長期的に見れば従来の教育が良いのか、そして日本社会にはどちらが適しているのかなども十分に検証していくべきである。

このように少人数指導は、社会の動きのひとつの事象でもある。それらを事実としてふまえながらできる限りよいものにしていくことが求められる。また、地域、学校は多様であり、一般化することは、非常に困難ではあるが、問題点を整理することによって、その実現可能性・効果の有無などもわかりやすくなる。そしてそれをふまえながら検証していくことによって適切な制度設計にもつながりより良い教育が行われだろう。今後の少人数指導の成否は現場の視点を吸収していくかにかかっている。

また、日本社会がどのような考え方で将来を歩むかも教育の諸問題、そしてその事象の一つである少人数指導のあり方にも大きな影響を与えるだろう。

#### 【参考文献】

- 1 香川県『香川県指導体制』  
<http://www.pref.kagawa.jp/kenkyoui/>  
2005年8月22日アクセス
- 2 国立教育政策研究所『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究』  
<http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/index.html>  
2005年4月1日アクセス
- 3 佐藤学『習熟度別指導の何が問題か』岩波ブックレット612  
2004年3月15日
- 4 鳥取県『30人学級の考察について』  
<http://www.pref.tottori.jp/kyouiku/syoucyu/30nin/30nin.htm>  
2005年8月23日アクセス
- 5 啓林館 田中博之『少人数指導・少人数指導の課題「効果的なコース編成とその配慮」』  
[http://www.shinko-keirin.co.jp/cskn/pdf/53\\_02.pdf](http://www.shinko-keirin.co.jp/cskn/pdf/53_02.pdf)  
2005年9月23日アクセス